

第37回 日本図書館協会建築賞

選考経過

2020年12月21日に締め切られた第37回日本図書館協会建築賞への応募は、すべてが公共図書館であり、前回と同様の4館にとどまった。

2021年1月21日に第1回建築賞審査選考委員会(以下、「選考委員会」とする)を開催し、主査の選定の後、本賞の主旨、審査方法などの確認を行った。その後、申請書類に基づく1次審査の結果、4館すべてを2次審査の対象とした。しかし、日程調整段階で、前回と同様に新型コロナウイルスの感染拡大予防により、公共図書館では休館や大幅なサービスの停止が行われたため、図書館施設委員会において現地審査を延期することが決定された。

10月以降ウイズコロナの常態化が進んだことから、応募館の意向を調査した上で、協会理事長と図書館施設委員会委員長の同意を得て審査を再開することとした。12月に4館それぞれを2人以上の審査委員が訪問し、現地審査、資料やデータの収集ならびに図書館関係者と設計者へのヒヤリングを行った。コロナ感染拡大防止の観点から、以前に視察を行ったことのある委員は現地審査への同行を控え、一部の館においては現地審査を行った上で、ヒヤリングはオンラインにて実施した。

2022年1月18日に開催した第2回選考委員会では、資料と写真などにより委員間での情報共有の後、慎重審議の結果、全会一致で以下二つの図書館を建築賞に選定した。

- ・安城市図書情報館(愛知県)
- ・梶原町立図書館(高知県) (※順不同)

選考総評

最初に、年末かつ感染症対策でご多用の折にも関わらず、現地審査にご対応いただいた応募者各位及び各館関係者に感謝いたします。本年度は、応募館が少なかったもののすべてが公共図書館であり、全く異なる地域や行政規模をバックグラウンドとしている中で、それぞれの状況に応じた新たな地域のための図書館のあり方にチャレンジしていたことが特記できる。

今回も昨年度に続き新型コロナウイルスの影響で、地域によっては閉館している期間も長く、郵送による予約貸出や書籍や館内の消毒など、市民サービスを絶やさぬような工夫や熱意を感じた現地審査であった。開館当初に思い描いていたサービスが提供できないもどかしさも関係者から伝わってきた。更に、設計時には全く予想もしていなかった長引く新型コロナウイルス感染症により、市民が図書館に期待することも大分変わってきたことも否めない。GIGAスクール構想により、小中学生もタブレットを一人1台持つ時代が始まり、これにコロナ禍が拍車をかけて実空間と情報空間がクロスオーバーした教育に加速的に移行している。一方、社会人は多くの業種でオンラインによるコミュニケーションを余儀なくされ、個人の身の回りのICT環境も整備され、デジタルツールの技術も自然と習得することとなった。在宅勤務の普及により、自宅周辺でのサードスペースや資料閲覧を求めて図書館利用を始めた市民のニーズも増えた。このような世情の変化に如何に柔軟に対応できるハードとソフトを持ち合わせているかが今後の図書館に求められる。そして、そういう今

安城市図書情報館

所在地：愛知県安城市御幸本町504番地1
 建築面積：2,906.54㎡
 延床面積：9,244.19㎡
 蔵書収容力：45万冊
 構造：S造一部CFT柱・RC造 地上5階・地下1階
 開館：2017年6月1日
 設計：三上建築事務所・清水建設設計企業体

*

安城市図書情報館は、JR安城駅南口周辺のにぎわいを取り戻すべく建設された中心市街地活性化拠点施設「アンフォーレ」の中核施設である。駅に近い側から、図書情報館を中心とする本館、駐車場、カルチャースクールなどが入居する民間施設の3棟が並び、2階ペDESTリアンデッキで連結されている。敷地の西側には、イベント会場にもなる願いごと広場や御幸公園が整備され、市民に開放されている。

3棟の統一感を出すために外壁はレンガ色を基調とし、広場や歩道にも関連した色彩や素材感を展開している。本館はそのレンガ調の壁面から、幅3.6mのガラスキューブが各階交互に市松模様を描くように突出する独特な外観をしている。その内部は「でん」と呼ばれる学びの空間で、窓辺の家具や利用者の様子で街を彩り、にぎわいを表出させる意図をもつ。駅から近づくとも見えてくる北壁面はほぼ一日陰をまとうため、それを補正する効果も感じ取れる。

本館は、下階から上階へ段階的に動から静へと機能特性を変化させ、4層の吹き抜け空間で視覚的につなげる構成を基軸としている。フロアごとにイメージカラーを変えてサービス内容の違いをわかりやすくしている。1階は交流多目的スペースで、220インチの大型モニターのあるフリースペース、カフェ、街の魅力発見支援コーナー、旅券・各種証明対応窓口、地下1階から続く多目的ホールなどがある。

2～4階が図書情報館で、2階は児童書を中心に、新聞雑誌コーナー、地元ゆかりの児童文学作家新美南吉を紹介する「なんきちさんのへや」な

どがある。3階は暮らしに役立つフロアで、「らBooks」と名付けられた中高生向けの本や話題の本、各分野の入門書などを取り揃えたコーナーがフロア中央部に排架されている。グループ学習室が6室設けられ、周囲にもオープンなグループ席を多数用意している。4階は学術性の高い一般書や文学、地域資料などが排架され、中央部の閲覧席のほか、予約制の個人学習室やブース、他階と同じく外周部の「でん」など、学習環境を充実させている。5階には事務管理諸室、学校図書館支援室がまとまっている。

また、図書情報館の各階に関係各課によるサービススペースが併設され、2階では3歳児までの子と保護者が利用できる子育て支援「つどいのへや」、3階には市民の健康づくりをサポートする「健康支援室・講座室」、専門家によるビジネス支援サービス「安城ビジネスコンシェルジュ(ABC)」の部屋がある。

公民連携(PPP)による複合施設の整備について、一般的なPFI事業では、節減効果の期待から直営を選択しない取り組みが大半であるが、安城市ではこれまでの図書館サービスの質の維持を継続すべきだとして、図書館運営をPFI事業から切り離し、市直営の図書館として継続を選択した経緯がある。その意欲が、選書とレファレンスを重点施策とする方針や「自由すぎる!?図書館」を標榜する運営につながり、多くの利用者を集めている。開館3年を期して策定されたこの先10年の図書館運営基本計画にも、関係各課との連携や行政支援も含めた継続的な発展への意思が込められている。また、2021(令和3)年度は図書館評価に加え、図書館協会による第三者評価も進行中である。他方、市内全域サービスでは公民館図書室9館が効果的な役割を果たしているが、アンフォーレの理念をどこまで浸透させていけるかに期待がかかる。ハード面では、厳しい施工コスト管理を思わせる家具などの物足りなさも散見されるが、今後のソフト展開を支えるに十分な広さや機能を備えていると評価し、建築賞に選定した。